＜前回：カール・バルト＞

（１）バルト１ ――『教会教義学』以前

バルト神学自体をキリスト教思想史の中に位置づけ解釈する作業。

「現在のわれわれの関心は、このような相対的神学史的評価をおこなうことよりは、むしろそれぞれのふくむ真理契機を明らかにし、その現代的意義を問うことにある。そしてそれぞれの真理契機をいかなる思惟の場において獲得できるかを問うことにある。」（森田、292）

（２）バルトの宗教社会主義批判――自由主義神学・宗教社会主義から「ローマ書」へ

１．スイスやドイツにおいてなされたキリスト教と社会主義との積極的な関係づけの試みとしての宗教社会主義。クッター、ラガツ

井上良雄『神の国の証人ブルームハルト父子――待ちつつ急ぎつつ』新教出版社。

２．バルト：自由主義神学、ザーフェンヴィルの労働問題、宗教社会主義運動

→　第一次世界大戦における戦争政策に対する神学者を含むドイツ知識人の公然たる支持、ドイツのキリスト教社会主義の愛国主義運動への転換。

４．批判の論点：宗教社会主義がその正しさを主張する際に、「キリスト教的」「宗教的」であると述べること。「宗教的」と主張することによって、政治という「この世」の事柄を宗教的神学的に正当化しようとするあり方。

「神の判決と審判」、「神の革命」を、あたかも自らの力で（「別の革命」として」）遂行しようとするところに、「革命家の悲劇」（Barth, 1922, 464）と不義が存在する。

宗教社会主義における「宗教的」と「社会的」を「宗教的―社会的」という仕方で結合する「ハイフン」が人間の不遜（巨人主義）であるとの批判

５．『ローマ書講解』の基本的認識：「神は天にいまし、汝は地上にいる！」（ibid., 294）との神と人間の「無限の質的差異」に基づいている。バルトにおける政教分離原則の徹底化。

６．バルトにおける政教分離原則は、単に国家と教会を原理的に区別するにとどまらず、むしろ、両者の区別が生じるその根源から、いわば逆説的にキリスト者の政治的実践を生み出すものとなったのである。キリスト教の弁証は、特別な弁証神学によって遂行されるのではなく、神学が真に教会的神学に徹するところにおいてこそキリスト教の弁証は有効になされる。

８．神と人間との絶対的な質的差異、神の下における人間の危機　→　危機神学

「弁証法神学の動因」「第一は、従来の自由主義神学とは異なった新しい聖書解釈である。第二は、宗教改革者の神学の新しい解釈である。第三は、キェルケゴールの再発見である。」（森田、278）

↓

『ローマ書』（第 2 版・序言）。「わたしに『体系』があるとすれば、それは、キェルケゴールが『無限の質的相違』と呼んだものに、その消極的かつ積極的意味において、できるだけ注目することである」。

↓

「弁証法神学の最初の出発点は、今日ではいずれの神学者によっても堅持されていない。」（森田、292）

９．歴史神学の後退。

歴史神学は必要ではあるが、「補助学」(Hilfswissenschaft)に過ぎない。

「弁証法神学の問題点は、知られざる神自身は歴史のどこにも入らず、ただ有限者に「触れる」だけである、というバルトの解釈にある。」（森田、290）

（３）バルト２ ――『教会教義学』を中心に

１．『教会教義学』の方法と体系

２．アンセルムスの発見。

『知解を求める信仰』(*Fides quaerens intellectum: Anselms Beweise der Existenz Gottes im*

Zusammenheng seines theologischen Prigramms,1931.)

← アンセルムス『プロスロギオン』、存在論的神の存在論証

← アウグスティヌス「理解するために信ぜよ（信じる）」（Credo ut intelligam）

３．知解を求める信仰：信仰固有の、信仰自体が可能性として内包するラチオ（神学固有の学問性）の展開としての神学。

神・啓示から。楕円（シュライアマハー）に対する円＝キリスト論集中。

「信仰と理性」に対して「信仰から理性へ」

神の啓示と信仰が接続するのが、「キリストの出来事」であり、その認識根拠は聖書的テキスト。

５．神の言葉の神学としての教会教義学

神の言葉（啓示）の三一性：神の第二位格＝キリスト／イエス、聖書、説教

↓

神学体系の基本構造としての三一性

６．福嶋揚『カール・バルト――破局のなかの希望』ぷねうま舎、2015 年。

（３）『教会教義学』再考

１．バルトと自然神学

バルトとブルンナーにおける自然神学論争（1934 年）とは何だったのか。

純粋的な神学の方法論的議論だったのか。

２．自然神学論争のコンテクストとしての教会闘争

Ａ・マクグラス『「自然」を神学する ── キリスト教自然神学の新展開』教文館、2011 年(原著、2008 年)。

４．トランスのバルト論：バルト神学において自然神学は場を持つ。

トーマス・F・トランス『科学としての神学の基礎』教文館、1990 年（原著、1980 年）。

「神学的科学と自然科学との相互関係」(13)

「認識しようとする実在に忠実でなければならない、また常に実在への冷徹なまでに忠実に関わりながら、行為し思惟しなければならない」、「両科学は一つの基礎的方法論をそれぞれの領域に適用したもの」「調和し合うように努めねばならない」(23)

「単に分析的にすぎない科学の偉大な時代は、今や終わろうとしている」(24)

「アインシュタイン」「キリスト教神学では、この段階は、すでに四〇年前にカール・バルトによって到達されていた」(25)

「アタナシオス」「「自然神学」と見なされるような議論を設定したのは、まさに創造と受肉についての統一された神学的理解の範囲内にであった」、「神認識と世界認識とが、創造者なる神にロゴスあるいは合理性の内に同一の究極的基礎を共有する」(105)

「バルトが伝統的自然神学に対して反対しているのは」「その合理的構造ではなく、それの持つ「独立的」という性格、すなわち自然神学が生ける三一の神の能動的な自己開示から抽象化し、「自然のみ」に基づいて展開する自律的な合理的構造なのである」、「その合理的構造が神認識の現実的内容と本質的に結合されるのでなければ、それは歪曲的な抽象化である、という主張」、「自然神学は正しく理解された場合には啓示神学の「内に」含まれる、とバルトは主張する」(121)

「幾何学は物理学の核心部に位置づけられる」(123)

「自然幾何学が動的で実在論的な物理学のなかに組み込まれている時空構造であるのと同様に、自然神学は動的で実在論的な神学のなかに組み込まれている時空構造なのである。」(124)

５．まとめ

(1) フォイエルバッハ宗教批判（近代的思惟）へのキリスト教神学の応答の一つの典型。

(2) 近代のキリスト教とその神学の問題性を鋭く捉え、キリスト教と神学の固有性を再確認した。神学にはその固有の論理と方法がある。

(3) フォイエルバッハの宗教批判に十分に答えたことになるのか。

フォイエルバッハ問題は終わらない。

(4) 宗教は不信仰な人間的努力という評価は、キリスト教の自己批判としてはわかるとしても、他の諸宗教を一方的にいっしょくたんに扱うのは正当なやり方と言えるか。バルトの立場からは、他の宗教との対話などあり得ない？！。

(5) ドイツ教会闘争における批判力。

戦後におけるバルトの権威化 → バルト主義の弊害

バルトとバルト主義との相違

(6) 自由主義神学の過度の否定。

神学思想、とくに歴史的研究への否定的影響。聖書学と神学との亀裂は深まった。

↓

近代とキリスト教との区別の確認、その上で、近代との関わりを再構築すること。

４．ブルトマン

「ブルトマン(Rudolf Bultmann, 1884-1976)」（大貫隆）

ドイツのプロテスタント神学者、新約聖書学を中心に『共観福音書伝承史』(1921)、『イエス』(26)、『信仰と理性』(33-65)、『ヨハネの福音書』(41)、『新約聖書と神話』(41)、『新約聖書神学』(48-53)などの代表作。

19世紀までのイエス伝研究の史実主義の限界を明らかにした上で、生前のイエスが述べ伝えた使信（ケリュグマ）と原始教会がイエスについて述べ伝えた使信に共通して含まれる実存理解を取り出し、それとの出会いと決断を促す「使信の神学」を唱道。古代の神話的な表現で書かれている聖書本文の背後にある実存理解に迫るための積極的な方法としての「非神話化」。『ヨハネの福音書』と『新約聖書神学』はその実践。

（１）近代聖書学と自由主義神学（これまでの復習）

１．近代的知のモデルとしての自然主義と歴史主義

啓蒙主義的合理主義：実証主義的自然科学と近代歴史学

神学も聖書研究も、この変動を免れてはいない。＝近代聖書学

超自然・奇跡の排除あるいは合理化

２．近代聖書学の諸原理

・パネンベルク

「トレルチによれば歴史的批判は、「すべての歴史的出来事の原理的同質性」を含む「類比の適用」に基づき、また、歴史的には普遍的な相関関係、「精神的・歴史的生のあらゆる現象の相互作用」があるという前提に基づいている。」(54)、「原理的同質性」、「あらゆる出来事は同質性を持つはずであるという要請」、「類比の持っている認識の力は、まさしく類比が非同質的なもののなかに同質的なものを見ることを教えるという点に基づく」(59)。

↓

方法論的現在中心主義＝歴史的思惟の解釈学的構造

制度的再帰性における歴史学・歴史研究

３．歴史的批判的方法：文献学＋歴史学→近代聖書学のパラダイム

伝承史：イエス→断片的な口承伝承（弟子たち）→収集・文書化→編集

・現存のテキストから最古層へ遡及し再構成する。弟子集団＝共同体における伝承の法則性の確定→逆算（様式批判：文学様式と生活の座との対応）

・編集者の意図・神学の解明（編集批判）

（２）ブルトマンの新約聖書学、聖書学者ブルトマン

４．弁証法神学運動におけるブルトマン

・方法論としての聖書学と自由主義神学の同質性
・弁証法神学への共鳴、キルケゴール的な信仰理解
５．新約聖書学の方法とその帰結
・様式批判
「言葉ないし物語の形での伝承片」「H. Gunkel とその弟子たちによって旧約研究に用いられた様式史的考察をそれらに適用する試み」(9)
「研究が内容批判(Sachkritik)抜きで遂行されえないのと同様に、文学批判(Literarkritik)を抜きにして成立しえないこと」(9)
「伝承と編集の分離」(10)
「個々の伝承の歴史を叙述することを課題とする作業」「それらの伝承片の成立と歴史を再構成することによって、成文化以前の伝承の歴史を解明する」
「ある共同体の生活の凝縮したものとしての文学が、その共同体のきわめて特定的な生活の表現および必要の中から生まれたということ」
「一定の文体(Stil)、様式（Form)、および文学類型(Gattung)を生み出した」
「すべての文学類型は固有の＜生活の座＞(Sitz im Leben)(Gunkel)を持つ」
「生活の座」「個々の歴史的事件ではなく、共同体の生活における典型的な情況ないし行動様式」
「＜類型＞ないし＜様式＞」「も美学的概念ではなく社会学的概念なのである」(11)
「様式史研究が他のあらゆる史学的研究と基本的に異ならず、循環論証の一種であることを認識することは、本質的に重要である」(12)
　　様式と共同体の生活
　　↓
・方法論的な制約：個人の内面には遡及しない。イエスの宗教意識は？
６．イエスと初期キリスト教
「イエスの告知は新約聖書神学の諸前提に属するのであって、新約聖書学自体の一部ではない。なぜなら、新約聖書の神学は、キリスト教がその対象、根拠、帰結をたしかめていくその思想の展開の中に存するのである。そして、キリスト教信仰というものは、キリスト教のケリュグマ（宣教)、つまりイエス・キリスト、しかも十字架につけられし者、甦えりし者を神の終末論的な救いの業として告知するケリュグマが存在してのちに、初めて存するのである。」(3)
・イエス個人　　初期キリスト教
　イエスの宗教運動（神の国についての告知）→　キリスト教共同体・宣教　→　神学
７．イエスをどう描くか
「イエスという歴史的現象を心理学的に説明しようとは全然考えていない。だから伝記本来の事柄は、短い導入的な一節を除いて、全然立ち入らない。」
「読者を一つの歴史観察に導こうというつもりはない」、「読者が単なる観察に留まってしまうかどうかは、もはや読者の問題なのである。」(5)
「イエスの「人となり」についての興味も排除される」、「イエスが自分をメシアと考えたか否か、・・・私は以下の叙述においてこの問題をまったく顧慮しなかった。それは結局のところ、この問題については確かなことは何も言えないからではなく、むしろこの問題は副次的な事柄だと思うからである。」(7)
「その対象は以上からしてイエスの生涯や人となりではなく、その「教説」、その宣教なのである。私たちはイエスの生涯や人となりについては少ししか知らない代りに、彼の宣教については多くを知っていて、一貫した像を構成することができる」、「史料が私たちに与えるものは、実際さしあたり教団の宣教なのである。」(9)

（３）ブルトマンと非神話化
８．聖書学者ブルトマン　→　バルトの弁証法神学への関与以降も、自由主義神学との関

わりを保持。

↓

聖書学によるのではないとすれば、信仰はどこで可能になるのか？

９．近代的世界観と聖書的世界観（黙示文学、グノーシス主義＝神話論）との対立

近代人は聖書的な宗教を信じうるか？

→ 信仰の事柄（宣教、内容）と世界観（形式）との関連はいかなるものか、両者は分離可能か。

10．聖書の非神話論化(Entmythologisierung)と実存論的解釈

11．キルケゴールの真理論：客観的真理と主体的真理

信仰と世界観との区別・分離 → 信仰の主体性の純化

これは個人的な事柄か。

12. 聖書を非神話論化することによって、実存論的解釈によって、主体的真理を取り出す。

世界観という形式ではない仕方での信仰の表現。

ハイデッガー哲学（『存在と時間』）の枠組み（本来性・非本来性）

13．創造物語：古代人の天文学や生物学の理論ではなく、神の語りかけに聴従し応答する人間。

信仰とは神の語りかけ（人間存在の善性のメッセージ）に対する「今ここ」の決断。

14．説教というモデル（プロテスタント・ルター派的？）

→ ブルトマン学派における「言葉の出来事」

神の語りかけと決断

15．ブルトマンの問題点

・信仰と世界観とは分離可能か、分離すべきか。形式と内容の分離？

決断の抽象化

・神話あるいは構想力の理解が一面的ではないか。

神話は過去の遺物か、構想力の解放性についてブルトマンは理解しているのか。

・近代的世界観あるいは個人主義的信仰を自明の仕方で前提にしていないか。

科学技術や個人主義への批判はブルトマンから可能か？

（４）ブルトマンの信仰論

①言葉の出来事性：語りかけ→言葉における継続・出会い→応答・決断

②時間性―終末論的（そのつどの今）→決断・聴従

③理解：神理解―自己理解（神学―人間学）の循環

④実存的な自己理解（自己の存在可能性）と歴史的知識・世界観との相違

⑤客観性→主観性・主体性

→自由の処理できない・神の主権

（５）引用資料

A. Glauben und Verstehen 1（著作集 11）

０．「自由主義神学と最近の神学運動」（１９２４）

１．「神を語ることは何を意味するか」（１９２５）：③④⑤

「～に関して語ること」は、常に、語られるものの外にある立場を前提とする。

語り手の具体的・実存的状況とのかかわりなしに真であるような一般的命題・一般的真理として神を語ることはありえない。(34)

体験や内面生活は、われわれはそれを客体化するやいなや、実存的性格を失っています。

そうした関連が失われると、この命題は、神が人間と全く別なあるもの、形而上学的実体、霊界、……要するに非合理的なものであることを意味しうるにすぎない。(37-38)

この世界の統一的連関の中で理解しうるものを現実的と見なす。(39)

この世界像は、われわれ自身の実存から目をそらしたところで立案されている。そこでは、われわれ自身は、諸々の客体の中の一つの客体と見なされ、われわれの本来の実存への問いから目をそらして獲得されたこの世界像の連関の中へくみこまれる。人間を加えて完成させた世界像を人は通常、世界観(Weltanschuung)と呼ぶ。(39)

２．新約聖書のキリスト論

パウロの研究が認識した神話論的表象は、それとどのように関係するのか。救いの生起とキリスト教的実存の神学的説明はすべて、同時代の概念性の中でなし遂げられる。その説明は、常に人間とその世界について語ることでもあるから、伝統的な人間学的・宇宙論的概念の中を動く。そのような概念は時の流れに沿って変化するので、パウロも神学やキリスト論も、批判ぬきでは理解されない。(296)

３．新約聖書における神の言葉の概念：①④

説教は聴くものの良心に向けられる。

人間についての理論的教えではなく、語りかけの生起が、実存的自己理解の状況を、実際にとらえるべき自己理解の可能性を人間に開くのである。語りかけは、あれこれを任意に選択させるのではなく、決断を迫る。(316)

説教は信仰を要求する。(317)

解釈は、有意義に遂行されるとすれば、当時の状況に応じてはめこまれていた神話論的概念性から実際に解き放たれ、それによって本体の意図が認められるようにならなければならない。

形而上学的意味での神子性、処女降誕、先在、最後のらっぱの響きと共に雲に乗ってくる再臨などの諸表象は、確かに神話論である。しかし、神がキリストの十字架を通してこの世にゆるしを与えたという思想も、神話論として除去されて良いのであろうか。……除去されるべき神話論はどこまでであろうか。それはキリスト教信仰にとってどこまで本質的なのであろうか。

神話論を除去するための批判的基準が与えられないだろうか。(357-358)

B.Glauben und Verstehen 2（著作集 12）

４.「新約聖書およびギリシア精神における世界と人間の理解」（１９４０）：②④

信仰は世界観ではないということである。というのは、世界観というものはそれぞれ自分の運命を世界と人間との普遍的な理解を根底として、その普遍的事象の一事例として理解しうるものにしようとするものである。新約聖書の考え方によれば、わたしはそうした普遍的状況において、わたしの真の実存を獲得するのではなく、いま、ここでという具体的状況において、すなわち自己を得るか、失うか、見定めがたい状況のなかで、自分の実存を獲得するのである。これは、わたしは、単独者として神の前に立つということなのである。(101)

信仰は、あらゆる未来の先取りとして、人間の非世界化を意味し、終末論的実存への転換を意味する。(110)

なんらかの総合、またこの二つにまたがる秩序の不可能性ということこそ、まさに、キリスト教的実存が終末論的実存であることのしるしなのである。

キリスト教の側からの世俗的科学への抗議というものは存在しない。なんとなれば、世界の終末論的理解は、世界説明の方法ではなく、非世界化は、世界解明においてでなく、ただ瞬間においてのみ完遂されうるものだからである。(113

C. Glauben und Verstehen 3（著作集 13）

５.「キリスト教的希望と非神話化の問題」（１９５４）：②④

両方の希望像が－ヘレニズム的グノーシス的規模有象と同様に、ユダヤの希望像が－神

話的な希望像であることは疑いのないことである。
これら二つの世界像は、神話的な古代の世界像と結びついている。
現代の人間にとっては、この神話的な表象の仕方は縁遠いものとなった。(111)
そういう人間の実存の本質についての見解が、それどころか知が神話的諸表象の基礎になっているかという、いわゆる非神話化の問題である。(113)
世俗化による非神話化：マルクスやヘーゲルにおける歴史的発展とその目的の像は、非神話化され、世俗化された原始キリスト教的終末論である。(114)
人間の内面において、決して到達されない将来が確かに事実上そのつど現在となったのである。この場合、古い神話的希望像は世俗化されたのではなく、霊化されたのである。(114)

６．「科学と実存」（１９５５）：④③
われわれを取り巻く世界やわれわれの出会う世界のもろもろの現象や、自然、歴史、人間、そして人間精神の方法論的研究を、われわれは科学と呼ぶ。
独特に人間的な生き方を実存と呼ぶ。
科学は、諸現象を認識しようとすることによって、諸現象を思惟の対象とし、諸現象を「対象化する」。(139)
科学においては、対象化する思惟は首尾一貫しており、方法論的に形成されている。(140)
客観化する叙述が生じ得ないような実存的理解が存在する。(149)
人格的存在は実存的出会いに対してのみ開く。(150)
実存はそのつど、瞬間の諸々の決断における出来事であることを意味する。
客観化する思惟は、この思惟の対象が属している対象領域の連関からその対象を理解する。(153)
このことは、神学に対しては神についての主張は客観的主張としては可能ではないという洞察に結果することになる。
神については実存からのみ、おそれとおののきのうちに、感謝と信頼の内に語られ得るのみである。(155)

７．「ルネ・マルレに問う」（１９５６）
神話的思惟と現代的思惟の対立を強調した際にいつも私は、両者の間に共通性が存することに、つまり両者共に客観化するような思惟であり、したがってある意味で神話的思惟は素朴であっても科学的な思惟と呼ばれうる点に共通性が存在することに、実際どんな疑いをもはさまなかったのである。(227)
新約聖書の帰省の諸々の物語の実存論的意味は明白にされることができ、現代の人間の人格的生は客観化する思惟の対象ではあり得ない。(227)

D.Glauben und Verstehen 4（著作集 14）
８．「非神話化の問題によせて」（１９６３）：④⑤
未来への開放性、将来的であるということ
歴史についての実存論的解釈が歴史的(historisch)な過去の客体的観察を必要とすることは、まったく疑問の余地がない。(171)
歴史科学は、歴史過程を、客体化の視線をとおして一つの完結的な作用連関として理解するのであり、その限りにおいてそれ自体非神話化を行っているのである。(171)
神話の位置づけに関しては、自然科学との間に根本的な違いがある。すなわち、自然科学は神話を排除するが、歴史科学はそれを解釈しなければならない。歴史科学は確かに一つの歴史的現象である神話論的叙述の意味について、問いを提出しなければならない。(172)
原始科学的な、したがって事物を客体化する思考は、事実すべての神話論に共通のもの

である。
　神話論的思考はしかし、素朴な仕方で彼岸を此岸に対象化する。……非神話化の試みは、これに対して神話の本来的意図を貫徹させようとする。すなわち、人間の本来的現実について神話それ自体に語らせようとするのである。(173)
　決定的なことはそうした比喩や象徴が現実的に一つの意味内容を含んでいるということなのであり、それを明らかにすることこそ哲学的、神学的省察の課題なのである。したがって、こうした意味内容がここでまた神話論的言語で表現されることはあり得ない。なぜなら、もしもそうだとすると、またしても解釈されねばならず、それは無限に続けられることになるからである。
　神が客観的に確認されるこの世の現象でない以上、神の行為についてはただ、それとの邂逅をとおして生じる我々の実存について語るという仕方でのみ語りうるに過ぎない。神の行為についてのこうした話法を、我々は「類比的」と名付けよう。(174)
　この命題は逆説が含まれていることになる。なぜなら、それはこの世の出来事と彼岸における神の行為との逆説的同一性を主張するからである。(175)
　　この逆説は、歴史的な出来事が、同時に終末論的であるという主張に通じる。(176)
９.「イエス・キリストと神話論」（１９５８）

＜参考文献＞

１．トレルチ「神学における歴史的方法と教義的方法について」、『トレルチ著作集２』ヨルダン社。
２．パネンベルク「救済の出来事と歴史」、『組織神学の根本問題』日本基督教団出版局。
３．エドガー・Ｖ・マックナイト『様式史とは何か』ヨルダン社。
４．ノーマン・ペリン『編集史とは何か』ヨルダン社。
５．浅野淳博ほか『新約聖書解釈の手引き』日本キリスト教団出版局編。
　辻学「第２章　資料・様式・編集」
６．ブルトマン『共観福音書伝承史ＩⅡ』(『ブルトマン著作集』１、２。新教出版社)、
　『新約聖書神学ＩⅡⅢ』(『ブルトマン著作集』３、４、５。新教出版社)
　『イエス・原始キリスト教』(『ブルトマン著作集』６。新教出版社)
　　『イエス』(1926)、「原始キリスト教――古代諸宗教の枠の中で」(1949)
７．John Painter, *Theology as Hermeneutics. Rudolf Bultmann's Interpretation of the History of Jesus*, The Almond Press, 1987.
８．熊澤宣義　『増補改訂　ブルトマン』日本基督教団出版局。
９．笠井恵二　『ブルトマン』清水書院。
10．土屋博　『教典となった宗教』北海道大学図書刊行会。
11．ティリッヒ『キリスト教思想史II』(著作集別巻３）白水社。
12．Ｈ・ツァールント『20世紀のプロテスタント神学（上）（下)』新教出版社。
13．Ｊ・モルトマン『二十世紀神学の展望』新教出版社。
14．森田雄三郎　『キリスト教の近代性』創文社。
15．田辺元「死の存在学か死の弁証法か」(『死の哲学　田辺元哲学選IV』岩波文庫)。
16．武藤一雄「第四章　終末論の問題」「第一節　現代神学における終末論―特にシュヴァイツァーとブルトマンについて―」(『神学と宗教哲学との間』創文社)、「解釈学的原理としての「中」について―「非神話化」論と関連して―」(『宗教哲学の新しい可能性』創文社)
17．辻村公一「ブルトマンとハイデッガー」(『ハイデッガー論攷』創文社)